

# ヒュームとウイトゲンシュタイン

## ——懐疑論に対するストローソンの自然主義を批判する——

橋 本 哲

### 1. はじめに

G. E. ムーアは、外的世界の存在についての懐疑論に反対して実在論を擁護するために、1939年の論文「外的世界の証明」において、眼前に自分の両手を掲げて「ここに自分の手がある」という前提から、外的事物の存在を証明しようとした。しかし、その証明に満足しない者達から、その証明が前提にしている「ここに手がある」こと自体の証明を求められて、「私はここに自分の手が二つあることを知っている」でもって答えたのである<sup>1</sup>。

P. F. ストローソンは、ムーアのこの証明について、バリー・ストラウドの論文「懐疑論の意義」を基礎にして、ムーアは懐疑論者の論点を全く捉え損なっていたか、懐疑論者のテーゼをただ全面的に独断的に否定しただけだ、と批判した<sup>2</sup>。

ストローソンは懐疑論の伝統的な問題として、(1)外的世界の存在、(2)他者の心についての知識、(3)帰納の正当化、(4)過去の実在性を挙げる<sup>3</sup>。そして、この中でも特に、外的世界（物体）の存在と帰納の正当化の根拠を問う懐疑について、ヒュームとウイトゲンシュタインの態度を取り上げる。例えば外的世界の存在についてストローソンの考えをまとめると次のようだ。

ヒュームとウイトゲンシュタインは、物体について、その存在の根拠を問う懐疑が、我々の合理的な処理能力の範囲外にあり、外的世界の存在についての信念が基礎付けられたものではない（根拠がない）ことを認めている。他方、その信念に対する疑いは真面目に受け入れるものでもないとも考えている。彼らは共に、「疑いの排除されているもの」があることを認めており、その根源が、ヒュームの場合には人間の自然本性に、ウイトゲンシュタインの場合には、子供のころからの活動、社会的実践を学ぶことにより、明示的にではないが形成されることにある<sup>4</sup>、というものである。

本稿では、ヒュームとウイトゲンシュタインの両者に認められる「疑いの排除されているも

1 Moore, G. E. [1959], pp. 146~150

2 Strawson P. F. [1985], p. 4

3 Strawson P. F. [1985], p. 2

4 Strawson P. F. [1985], pp. 14~15

の」について、ストローソンがそれらをどのように位置づけていたかを検討し、彼の提唱する自然主義的方法は、無視する、あるいは懐疑論を避けると言うだけで、「疑いの排除されているもの」の确实性の内実を示すことができないこと、その确实性は、ウィトゲンシュタインが考察する言語ゲームの構造から示すことができるということ、そして、ストローソンはウィトゲンシュタインのこの観点を見落としているということを論じる。

このことを明らかにするために、まず次の第2節で、懐疑論に対するヒュームとウィトゲンシュタインの態度について、ストローソンの見解をまとめる。次いで第3節でヒューム、第4節でウィトゲンシュタイン、それぞれについて、彼らのテキストをもとに、その考え方を考察し、最後に第5節でまとめとして、ストローソンの掲げる自然主義的方法は、それによって懐疑論を無視する（避ける）というだけで、「疑いの排除されているもの」の确实性を示すことができないこと、そしてその确实性の内実は、ウィトゲンシュタインの言語ゲームの構造から示されるものであること、懐疑論者の疑いは意味をなさないことを論じる。

## 2. 懐疑論に対するヒュームとウィトゲンシュタインの態度についてのストローソンの見解

ストローソンは、懐疑論に対して、常識や神学や疑似科学的な考察<sup>5</sup>を利用した論証によって直接にそれを拒否する以外に、自然主義的方法 (the way of Naturalism) があるとして、ヒュームとウィトゲンシュタインを挙げる<sup>6</sup>。それは、ヒュームにあっては人間の自然本性に基づく自然主義、ウィトゲンシュタインにあっては、子供のころから社会的実践を通じて学ぶ言語ゲームの枠組みに基づく社会的自然主義<sup>7</sup>とも呼べる自然主義のことである。彼らは、こうした自然主義によって、懐疑論を論証によって拒否するのではなく懐疑論を無視する、と言う。

本節では、ストローソンのこの主張を少し詳しく見ていきたい。

ストローソンはヒュームについて、懐疑論者ヒュームと自然主義者ヒュームという二人のヒュームがいると言う<sup>8</sup>。懐疑論者ヒュームは、「いかなる确实さも我々に提供することができず、懐疑論に反対できない哲学的な批判的思考」のレベルにいるヒュームであり、自然主義者ヒュームは、「自然本性 (Nature)、即ち信念への逃れ難い自然の関与によって、批判的思考

5 ストローソンは、「疑似科学的な考察」とは、物理理論が物理的現象の最も有用な説明を与えるように、物体の存在を認めることが経験現象の最も有用な説明を与える、という科学理論に暗黙に比較してすることとしている。(Strawson P. F. [1985], pp. 15~16)

6 Strawson P. F. [1985], p. 8

7 Strawson P. F. [1985], p. 19

8 以下、Strawson P. F. [1985], pp. 9~11

[懐疑論]の要求が完全にひっくり返されて、その要求が抑圧される、通常の経験的思考<sup>9</sup>のレベルにいるヒュームである。そして、懐疑論者ヒュームは、自然主義者ヒュームの前に、無視される存在者、無力な存在者として立ち現われると言う。

「自然主義者ヒュームに従うと、懐疑論者の疑いは論証によって立ち向かわれるべきものではない。……それらは単に無視されるだけだ。なぜならそれら[懐疑論者の疑い]は空回り(idle)しているのであって、自然の力、即ち、自然に植えつけられた信念に対する我々の傾性(disposition)の力[自然本性]に対して無力であるからなのである。(Strawson P. F. [1985], pp. 10~11、「          」の強調はストローソン)」

ヒュームにおいて、物(外的世界)が存在するという信念と帰納による信念形成は、我々の「信念への逃れ難い自然の関与[自然本性]」によって、懐疑論者の疑いから免れており、論証によってそれら信念を正当化せよと言う懐疑論の要求は、無視されるだけだと、ストローソンは言う。

また、ストローソンはウイトゲンシュタインについて、彼は、命題を、理性と経験の光の下で問いと決意に現れる命題と、疑いが排除されていて問いと決意に現れない命題の二つに区分する<sup>10</sup>、と言う。

ストローソンは、ウイトゲンシュタインにおける「疑いの排除されているもの」について、ウイトゲンシュタインの草稿『確実性について』(以下「OC」と表示する<sup>11</sup>)から多量の章句や比喩を引用して<sup>12</sup>、彼の一般的な傾向や意図を、次のようにコメントする<sup>13</sup>。

<sup>9</sup> Strawson P. F. [1985], p. 10、なお、[...] 書きは論者の挿入による。以下本稿において同じ。

<sup>10</sup> ストローソンは、この区分は、ヒュームにおける探究に値するものと、探究することが無益で我々のあらゆる推論において当然の事とみなさねばならないものとの区別 [(T 1.4.2.1; SBN 187, 邦訳 p. 219)] に相当すると言う。(Strawson P. F. [1985], p. 11)

<sup>11</sup> 以下、OCからの引用は、紛らわしい場合を除いて節番号だけを表示する。なお、本稿においてウイトゲンシュタインの著作からの引用は邦訳書を参考にして論者が訳し、ヒュームの著作からの引用は邦訳書によった。

<sup>12</sup> ストローソンは、OCから「いくつかの命題は疑いを免れている」 (§ 341、強調はストローソン)、「[我々の経験命題の] 体系において特有の論理的役割を持つ命題」 (§ 136、[...] の挿入と強調はストローソン)、「我々の思考の足場」 (§ 211、強調はウイトゲンシュタイン)、「論証がそこにおいて生きる要素」 (§ 105) を始めとして、§ 415, 342, 253, 411, 83, 151, 162, 94, 95から引用している。(Strawson P. F. [1985], p. 12)

なおここで、ストローソンが引用するこれらは、後に論じるように、ウイトゲンシュタインにおける「世界像」 (§ 93) を構成するものであり、その世界像はその正しさを自分自身が納得したから持っているのではなく、「受け継いだ背景であり、それによって私は真偽を区別する」 (§ 94) ものであり、この世界像は、「明示された規則を学ぶことなく純粋に実践的に学ぶことのできる」 (§ 95) ゲームの規則に比較されるものである。

<sup>13</sup> Strawson P. F. [1985], pp. 12~15

- (1) ウイトゲンシュタインは、我々の信念体系において、経験的な確証か反証を受ける実際の探究や疑いを扱うもの、即ち、実際の経験的な探究に関わるものと、「足場」、「枠組み」、「背景」、「基礎」等によって表現される極めて異なる性格を持つもの、即ち、実際に探究する際に当該探究自体を支える枠組みに関わるものとを区別する。
- (2) 探究自体を支える枠組みなどの多くは、子供のころからの活動、社会的実践を通じて知らず知らずのうちに形成されるものであって、明示的に学んだり教えられたりするものではない。またそれらは、伝統的な経験論者の意味で基礎とはみなされない。
- (3) 実際の経験的な探究に関わるものとその探究を支える枠組みに関わるものという、この区別される二種類のものは、目に見えない変化を受けて、時とともに変わりうるものである<sup>14</sup>。

以上から、ストローソンは、ヒュームとウイトゲンシュタインについて次のように論じる<sup>15</sup>。

- (1) ヒュームにおいてあらゆる探究の枠組みを構成するものは、
  - ア 物体の存在を受け入れる
  - イ 帰納的な信念についてその信頼性を受け入れる
 の二つであって、これらは自然本性によって、我々の心の中に根深く埋め込まれている。
- (2) ウイトゲンシュタインの場合は、表面上はもっと複雑で、
  - ア 探究の枠組みに関する諸命題は、ヒュームが掲げる二つ以外にもっと様々なものがある
  - イ 探究の枠組みは、変化しうる
- (3) あらゆる探究の枠組みを構成するものの根源は、ヒュームにおいては「自然本性」（自然主義）であり、ウイトゲンシュタインにおいては、「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」（社会的自然主義）である。
- (4) ヒュームとウイトゲンシュタインは、両者共に、物体の存在と帰納的な信念に対する信頼は、基礎付けられたものではないと考えている。またそれと同時に、これらに対する疑いは真面目に受け取るものではない、とも考えている。

以上からストローソンは、ヒュームとウイトゲンシュタインに共通する、次のような懐疑論者に対する態度を見て取る。

外的世界の存在などの信念について、懐疑論者の疑いに立ち向かおうとすることは、我々の信念体系におけるそれら信念の役割を、全く誤解することである。それらの信念に根拠はない。それらの信念に対する懐疑論者の疑いに対処する正しい方法は、論証によってそれを反駁

<sup>14</sup> ストローソンはここで OC から、川の河床・河岸と水の動きの節（§96～99）を取り上げている。（Strawson P. F. [1985], p. 13）

<sup>15</sup> Strawson P. F. [1985], pp. 14～15

することではなく、その疑いは無効で、非現実的で、見せかけであるということを指摘することである。論証によって懐疑論者の疑いに反駁しようとすることは、懐疑論者の疑いと同様に無効の試みである。これがヒュームとウィトゲンシュタインに共通する態度である。

かくしてストローソンは、懐疑論者の疑いについて、常識や神学や疑似科学的な考察による論証によって直接にそれを拒否する以外の方法があり、それは、ヒュームやウィトゲンシュタインにおける自然主義によるものである、と言う。我々には、基礎的な信念として受け入れないではいられないものがあり、その根源は、ヒュームにおいては「自然本性」、ウィトゲンシュタインにおいては「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」である。我々は、あらゆる推論において当然のこととして認める以外に、どんな選択肢も持たないものを持っている。こう結論し、伝統的懐疑論者に対する批判として、自然主義を提唱する<sup>16</sup>。

ここで確認しておくことは、ストローソンは、懐疑論を論駁するための常識や神学や疑似科学的な考察による論証と対比させて、ヒュームの「自然本性」やウィトゲンシュタインの「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」を措定することによって、懐疑論を無視する、あるいは回避する方法として、「自然主義」を提唱していることである。

しかし、「自然本性」や「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」を措定することによるストローソンの「自然主義」や「社会的自然主義」は、懐疑論を無視する（回避する）というだけで、懐疑論者が求める外的世界の存在や帰納推論の確実さの内実までは示されない。

なぜなら、ストローソンの言うヒュームの「自然本性」やウィトゲンシュタインの「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」は、外的世界の存在や帰納推論の確実さを生む原因でしかないからである。

このことを明らかにするために、ヒュームとウィトゲンシュタインそれぞれについて、彼らのテキストからそのことを見ていくことにしよう。

### 3. ヒュームについて

ヒュームの哲学では、認識の基礎は知覚である。知覚は印象と観念に区分され、その違いは、我々の意識に入ってくる際の勢い（活力）と生氣（生き生きさ）の度合いにある。印象は勢いと激しさを伴い、観念は印象の生氣のない像である。その違いは、感じることと考えることの違いであるとも言われる<sup>17</sup>。全ての観念は印象からの複製として生じる<sup>18</sup>。

ヒュームにおいて、推論は関係づけである。彼は、自然的関係として、「類似性」、「隣接」、

<sup>16</sup> Strawson P. F. [1985], p. 8

<sup>17</sup> T 1.1.1.1; SBN 2, 邦訳 p. 13

<sup>18</sup> T 1.1.7.5; SBN 20, 邦訳 p. 31

「原因と結果」の三つの関係<sup>19</sup>を、哲学的関係として、「類似性」、「質の度合い」、「反対」、「量又は数の比」、「同一性」、「時間と場所の関係」及び「因果関係」の七つの関係を挙げる<sup>20</sup>。最後の「因果関係」のみが感覚の印象を超えた結合を生む<sup>21</sup>。

またヒュームは、全ての推論を、論証的推論（観念の比較のみに依存する推論で、代数学、算術等の直観的、論証的に確実であるもの）と、道徳的推論（事実及び存在に関する推論）の二種類に区分する。事実に関する推論は、原因と結果の関係に基づいており、広義の蓋然的推論と言われる。ヒュームはさらに、この広義の蓋然的推論を、疑念や反対の余地のない確証（立証的推論, proof）と、それ以外の狭義の蓋然的推論の二種類に区分する<sup>22</sup>。

ストローソンがヒュームに関係付ける「自然本性」に関わる推論は、広義の蓋然的推論（因果推論）の中の、疑念や反対の余地のない確証、即ち、立証的推論のことである。次節ではこの立証的推論を中心に見ていくこととする。

### 3-1 立証的推論について

ヒュームによれば、対象相互の恒常的随伴関係を経験すると、現前している印象が、想像力による自然な観念の結合原理の一つである「原因と結果（因果関係）」によって、別の対象の観念に関係づけられる（観念連合<sup>23</sup>）。そして、習慣（理性ではない）によって、一方の印象から直ちに他方の観念への移行がなされる。その移行は、必然的結合として感じられる（思念されるのではない）ことによって、信念（確実さ）に至る<sup>24</sup>。これが立証的推論である。

「現前する印象に基づいて生じるすべての信念はただこの起源〔習慣〕からのみ生じる。……我々が二つの印象が互いに随伴しているのを見慣れている場合には、一方の印象の出現あるいはその観念は、我々を直ちに他方の印象の観念へと運ぶ（移行させる）のである。（T 1.3.8.10; SBN 102, 邦訳 p. 127）」

観念連合は、想像力によるものである。想像力による観念の自然な結び付け（「原因と結果」の関係）によって、我々は、一つの対象とそれに恒常的に随伴するものとの間の結合を持つ。しかし、観念連合による観念の自然な結合だけでは必然性を持たない。

<sup>19</sup> T 1.1.4.1; SBN 11, 邦訳 p. 22

<sup>20</sup> T 1.3.1.1; SBN 69, 邦訳 p. 89

<sup>21</sup> T 1.3.2.2; SBN 74, 邦訳 p. 94

<sup>22</sup> T 1.3.11.2, 3 ; SBN 124-125, 邦訳 pp. 151~152、狭義の蓋然的推論は、憶測からの推論で、偶然（原因の不明なもの）や諸原因（複数の原因）から生じるものである。

<sup>23</sup> T 1.3.14.31; SBN 170, 邦訳 p. 200

<sup>24</sup> T 1.3.7.6; SBN 97, 邦訳 p. 120、なお、ヒュームにとって信念とは、「経験に伴うものであり、ある特異な心持ち、すなわち習癖によって生み出された生き生きとした想念に他なら」（Ab 27; SBN 657, 邦訳 p. 217）ない。

因果関係（観念連合による観念の自然な結合）に必然性を与えて信念に至らせるものは習慣である。

「私は、頻繁な反復の後では、対象の一つが現れれば、精神が、習慣によって、その対象にいつも伴っていた対象を考慮するように、また、それを、その最初の対象に対する関係の故に、より強い光の下で考察するように、決定されている。(T 1.3.14.1; SBN 156, 邦訳 p. 184、「          」の強調はヒューム)」

立証的推論に関わる信念（確実さ）は、想像力と習慣という自然本性によって決定されている。理性によって帰納推論に必然性を与えることはできない。帰納推論に必然性を与えるものは習慣である。

信念は習慣によって、即ち過去における頻繁な反復から、理性や想像力の新たな働きなしに直ちに生じる。いかなる理由もなく精神が恒常的かつ一様に移行を行う<sup>25</sup>のである。いかなる理由もなくというのは、自分の内にその働きを何も意識しないからである。

「信念は、理性又は想像力の新たな働きなしに直ちに生じる……なぜなら、私は、そのような働きを何も意識しないからであり、主題（現前する印象、過去の印象及び恒常的随伴）の内に、そのような働きの基礎となりうるようなものを、何も見出さないからである。(T 1.3.8.10; SBN 102, 邦訳 p. 127、(……)の挿入は邦訳者、「          」の強調は論者)」

「知性又は想像力が、過去の経験を反省することなしに、ましてや、過去の経験について原理を形成したり、その原理に基づいて推論したりすることなしに、過去の経験に基づいて推理を行う。(T 1.3.8.13; SBN 104, 邦訳 p. 129、「          」の強調は論者)」

立証的推論において、習慣という自然本性は、「同じ随伴を未来に期待するように [逃れ難く] 私を決定」(T 1.4.7.3; SBN 265, 邦訳 p. 300) している。

これが立証的推論に関わる必然性の中身である。立証的推論における必然的結合は、習慣、過去における反復によって、思考または想像において逃れ難く私を決定している。ヒュームはそのような習慣的結合を、思考あるいは想像において感じる、あるいは心持ちを持つと言い、それが必然的結合の観念の源泉である、と言う<sup>26</sup>。ヒュームにおいて信念（必然的結合の観念）は、思念されるというよりも、感じられることにある。

<sup>25</sup> T 1.3.6.12; SBN 92, 邦訳 p. 114

<sup>26</sup> EHU 7.2.5; SBN 78, 邦訳 p. 70

「信念は、我々の自然本性 (*natures*) の思想的部分の作用というよりも、感受的部分の作用であるというのが、より正しい。(T 1.4.1.8; SBN 183, 邦訳 p. 215、「*・*」の強調はヒューム)」

「現前する印象からの移行は、常に観念を活気づけ、強化する。ある対象が提示されると、それにふだん随伴している対象の観念が、直ちに、何か実在する堅固なものとして、我々を打つのである。この観念は、思念されるというよりも、感じられるのであり、……(App 9; SBN 627, 邦訳 p. 315、「*・*」の強調はヒューム)」

このようにヒュームは、立証的推論に関わる信念(確実さ)を、習慣により必然的結合を感じるといふ心理的確実さによって、説明する。それは証明ではない。

さて、知識等の確実さを、おおまかに、見て分かるというような感覚による「直観知」によるもの、推論による「認識知」によるもの、訓練や行動等の実践を通じて身に付ける「実践による確実さ」によるもの、という三つに区分してみよう<sup>27</sup>。立証的推論に関わる確実さは、直観知や認識知と重なるところもあるが、根源的には習慣という実践を通じて身に付けられた確実さであると考えられる。

立証的推論は因果推論であり事実の関係である。事実の関係の帰納推論は、理性によって正当化できず、論理的確実性をもたらさない。しかし、ヒュームの立証的推論は事実の関係ではあるが、習慣という実践を通じて、必然的結合(確実さ)を感じるものである。ヒュームは、このように立証的推論の確実さを、習慣という実践(自然本性)によって説明したのである。それは確実さが生まれる原因の説明である。

「ここで我々の注意に値すると思われることは、原因と結果についての我々のすべての判断の基礎である過去の経験が決して気付かれないほど目立たない仕方で精神に働きかけることができ、ある意味では我々に全く知られないことがあり得る、ということである。……精神は記憶の助けなしに移行を行う。習慣は我々が反省するまもなく働く……経験は、隠れた働きによって、一度も考えられることなしに、信念、即ち原因と結果の判断を生み出すことができる。(T 1.3.8.13; SBN 103-104, 邦訳 p. 128)」

ヒュームの習慣という「自然本性」は、立証的推論の必然的結合(確実さ)の論理的根拠

<sup>27</sup> 実践を通じて身に付ける確実さは直観や推論による知識とは異なる確実さである。また、ヒュームが実際にこのように区分しているわけではないが、ヒュームの挙げる自然的・哲学的関係の中で、「隣接」、「類似性」、「質の度合い」、「反対」、「同一性」、「時間と場所の関係」は直観知、「量又は数の比」と一部の「因果関係」は認識知に当たるといえよう。



(内実)ではなくて、その確実さを生み出す原因である。

ヒュームの立証的推論は、「原因と結果」という観念連合（想像力による観念の自然な結合）と、習慣という実践によって、必然的結合（確実さ）が与えられる。この想像力と習慣が、「自然本性」の中身である。

このようにヒュームは、立証的推論とその確実さを、自然本性である想像力と習慣及び心理的確実さによって説明する。それは、立証的推論の持つ確実さの内実を説明するものではなく、その確実さが生み出される原因を説明しているのである。ヒュームにおける想像力や習慣という「自然本性」は、立証的推論の確実さを生み出す原因として措定された、いわば仮説である。

従って、自然本性（想像力や習慣）によって生み出された立証的推論が、疑う余地のないのはなぜなのかという確実さの内実についての説明は、感じるという以外に与えられていないのである。

### 3-2 物体の存在について

物体（外的世界）が存在するという事は、ストローソンも指摘しているように、ヒュームにおいてはあらゆる論究の当然の前提とされるべきものであり、探究の主題は、物体が存在するか否かではなくて、物体の存在を信じさせる諸原因に関わるものであった。

「我々は、いかなる諸原因が我々に物体の存在を信じさせるのかと問うてもよいが、物体が存在するか否かと問うことは、無益である。物体が存在するという事は、我々のあらゆる論究において、当然のこととしなければならない点なのである。

我々の現在の探究の主題は、我々に物体の存在を信じさせる諸原因に関わるのである。  
(T 1.4.2.1, 2; SBN 187-188, 邦訳 p. 219, 「          」の強調はヒューム)」

ヒュームは、物体の独立連続存在を、知覚（感覚）や論証（理性）によって推論することはできず<sup>28</sup>、その信念の正当化は、人間の能力を超えるものだと考える。物体の独立連続存在は、想像力による自然な観念の結合原理の一つである「類似（知覚の間の類似性）」による観念連合によって<sup>29</sup>、虚構されるのである。

ヒュームは、知覚のみを原理とした理性による推論は、「全ての外的対象を消滅させ、外的対象に関する最も常軌を逸した」(T 1.4.4.6; SBN 228, 邦訳 p. 260) 過激な懐疑論を招くに至り、我々は、それを論駁することはできない、と言う。

<sup>28</sup> T 1.4.2.11; SBN 191, 邦訳 p. 223, T 1.4.2.14; SBN 193, 邦訳 p. 225

<sup>29</sup> T 1.4.2.32; SBN 203, 邦訳 p. 235, T 1.4.2.37; SBN 206, 邦訳 p. 238

「理性と感覚能力の両方に関するこの懷疑は、決して根本的に癒されることのあり得ない病であり、我々がそれをどれほど追い払おうとも、また時には我々がそれから完全に免れているように見えようとも、どの瞬間にも我々に戻ってこざるを得ない病である。(T 1.4.2.57; SBN 218, 邦訳 p. 251)」

しかし我々は、人間の自然本性が、因果推論（立証的推論）の必然的結合を感じさせるのと同じ種類の心持ちを持つことで、知覚されなくなった後にも、その対象が存在していると信じるように導くのだ、と言う。

「我々が、何らかの事物の外的存在を信じる時、言い換えれば、ある対象がもはや知覚されなくなった後のある瞬間においてもその対象が存在していると想定するとき、この信念は〔立証的推論の信念と〕同じ種類の心持ちにほかならないのである。(Ab 27; SBN 657, 邦訳 p. 217, 「 $\dot{\cdot}$ 」の強調はヒューム)」

「私は、世界を、ある実在的で持続するものであり、たとえそれが私の知覚作用にもはや現れていないときでもその存在を保持するものであると見なすように、自然な仕方で導かれるのである。(T 1.4.2.20; SBN 197, 邦訳 p. 229)」

ヒュームは懷疑論を否定しない。ただ、それを追い払ってくれるのが自然本性である。懷疑論は理性によって追い払うことはできない。

「非常に幸運なことに、理性がこれらの暗雲〔懷疑論〕を追い払うことができないので、自然本性自体 (nature herself) が、このために十分であり、この精神の緊張を緩和することによってか、あるいは、これらの幻影を追い払ってくれるような気晴らしと生き生きした感覚の印象によって、この哲学的な憂鬱とせん妄から、私を癒してくれるのである。(T 1.4.7.9; SBN 269, 邦訳 p. 304)」

### 3-3 ヒュームの自然本性

ヒュームにおいて、立証的推論（因果推論）に必然性を与え、物体の存在を信じさせるものは、人間の観念連合（自然な想像力）と習慣（実践）、即ち、自然本性であり、それを感じるという心理的确实さにおいて受け取るのである。立証的推論（因果推論）の必然性・确实さと物体の存在の疑いえなさは、人間の自然本性、即ち、観念連合と習慣という原因によって説明される。

ストローソンは、このような自然本性によって懷疑論を無視する（避ける）という自然主義

的方法を提唱する。しかし、「自然本性」は、立証的推論や物体の存在の确实さを生み出す原因なのである。「自然主義的方法」は、立証的推論（因果推論）や物体（外的世界）の存在に対する懐疑論を無視（回避）するだけであって、それらの确实さの内実を説明するものではない。

なお、懐疑論を拒否するための論証としてストローソンが引き合いに出す「神」も「自然本性」と同様に原因であり<sup>30</sup>、その論理的身分は「自然本性」も「神」も同じである。従って、ストローソンの「自然本性」による「自然主義的方法」と「神」は、その身分が同じレベルにあり、懐疑論者が求める立証的推論や物体の存在の确实さの内実を説明するものではない。

#### 4. ウィトゲンシュタインについて

後期ウィトゲンシュタインの哲学のキーワードの一つは、言語ゲームである。言語ゲームは、言語とそれに関わる人間の諸行動、生活形式の一部<sup>31</sup>である。晩年のウィトゲンシュタインは、言語ゲームの基礎にある「确实性」に関心を持っていた。それは彼の『确实性について』という草稿の形で残されており、そこでは次のような考察がなされている。

- (1) 分別のある疑いには疑う根拠があり、疑いは際限なく続かない。疑いのゲーム自体が确实さを前提にしており、疑いが終わるところには疑いの欠如がある<sup>32</sup>。
- (2) 言語ゲームは、探究、問い、疑い等の通常行われる言語ゲーム（認識的ゲーム）と、その基礎にある「揺るぎないもの」<sup>33</sup>の二層の構造からなっている<sup>34</sup>。「揺るぎないもの」は一つの体系、一つの構造を形成しており<sup>35</sup>、世界像とも言われ<sup>36</sup>、言語ゲームの全体が、この種の「揺るぎないもの」に基づいている<sup>37</sup>。「揺るぎないもの」に根拠は無い。通常言語ゲームにおいて主張される知識や疑いは、その基礎にある「揺るぎないもの」とカテゴリーを異にする<sup>38</sup>。

30 バークレイは、感覚経験の原因として善意の神という仮説を立てた。(Strawson P. F. [1985], p. 4、強調は論者)

31 PI § 7, 23

32 § 56, 88, 115, 122, 123, 232, 323, 334, 370, 392, 450, 519, 625

33 「确实さ」 (§ 233 他)、「揺るぎない確信」 (§ 86, 103) のことである。

34 § 88

35 § 102, 225, 274

36 § 93, 世界像とは「揺るぎないもの」の体系（必ずしも明示的に理解されているわけではない）のことで、ウィトゲンシュタインは世界像について次のように言う。

「私は一つの世界像を持っている。それは真であるのか偽であるのか。とにかくその世界像が私のあらゆる探究と主張の基礎なのである。これを記述する諸命題は、必ずしも皆同等に検証を受けるものではない。」 (§ 162), 「[世界像は] 探究の当然の基礎であって、表明されるものでもない……」 (§ 167)

37 § 411, 446

38 § 308

- (3) 「揺るぎないもの」は、推論を経て意識的に確信されるに至るのではなく<sup>39</sup>、日常の実践や学習を通じて自覚的・非自覚的に受け入れられる<sup>40</sup>。「揺るぎないもの」の確実さは行動の中に示されており、それを言葉にして表現することは意味をなさない<sup>41</sup>。端的な行動は、確かさに対応していて、知識に対応しているのではない<sup>42</sup>。
- (4) 「揺るぎないもの」の表現は、経験命題の形式をしているが、経験命題の中で特異な論理的役割<sup>43</sup>（蝶番<sup>44</sup>の役割）を果たしており、規則のような性格を持っている<sup>45</sup>。その身分は、真偽を問うことが有意義な経験命題ではなく、文法的な命題（語の用法や規則を記述するもの）として考えられ<sup>46</sup>、その確実さは文法的な確実さである。しかしこうした経験的なものと文法的なものとの区分は、固定したものではなく、変化することがあり、両者の間に明確な境界線を引くことはできない<sup>47</sup>。

以上を整理すると、言語ゲーム全体は、日常行われる知識についての主張、疑い、探究、誤り等の通常の言語ゲーム（認知的ゲーム）と、その基礎にある「揺るぎないもの」という、二層の構造からなっていることがうかがわれる。

なお、ワイトゲンシュタインの言う「揺るぎないもの」は、ヒュームの立証的推論や物体の存在だけでなく、ムーアが、1925年の論文「常識の擁護」において確信を持って知っていると主張する常識<sup>48</sup>を始め、無数にある。例えば OC では、「ここに一つの手がある」（§1）、「あらゆる人間には両親がいる」（§240）、「あれは木である」（§347）等<sup>49</sup>が挙げられている。これらはその主張を正当化する根拠を示すことができない<sup>50</sup>、基礎付けられていない信念である。

「基礎付けられた信念の基礎に、基礎付けられていない信念がある。（§253）」

39 §103

40 §128, 143, 144, 160, 161, 162, 170, 263, 283, 286, 476, 480, 522, 538, 548

41 §460, 461

42 §110, 148, 204, 510, 511

43 §136

44 §341, 343

45 §95, 494

46 §56, 57, 58, 167, 213, 308, 401

47 §96, 98, 319

48 「地球は私の身体が生まれる以前から何年も存在してきた」等（Moore, G. E. [1959], p. 33）

49 この他にも、「私には脳がある」（§4）、「あそこに椅子がある、ドアがある」（§7）、「太陽は天空にあいた穴ではない」（§104）、「自動車は大地から生えてこない」（§279）、「この家には地下六階に至る階段はない」（§398）、「自分は英国にいる」（§421）、「 $12 \times 12 = 144$ 」（§447）、「私は L. W と呼ばれる」（§470）、「この色は『緑』と呼ばれる」（§624）等が挙げられている。

50 「我々の信念に根拠がないことをはっきりと理解する、これが難しいのだ。」（§166）

通常行われる、知っている(知識)という主張、疑いや問いとその答え、検証や反証の探究、主張の誤りと訂正等の言語ゲームは、こうした「揺るぎないもの」が基礎にあって、有意味に行われる。「揺るぎないもの」は、通常の言語ゲームがそこで生きる場である。我々は、「自分の座っている枝を切り落としてはならない」(PI § 55) ののである。「揺るぎないもの」を疑うことは、普通は意味をなさない(ナンセンスな)疑いである。

「揺るぎないもの」は一つの体系、一つの構造を形成している。しかしそれは、推論を経るなどして意識的にその確信に至ったのではなく、その体系を記述することはできない。

「私は、それらの確信の体系を記述できるというのではない。それにもかかわらず私の確信は、一つの体系、一つの構造を形成している。(§ 102)」

「私は一定の思考の足取りに従って意識的にその確信に至ったのではなく、その確信は私がそれに触れることができないほど私の問いと答えの内にしっかりと固定されている。(§ 103、「 $\cdot\cdot\cdot$ 」の強調はウイトゲンシュタイン)」

この「揺るぎないもの」の揺るぎなさを、ウイトゲンシュタインは、「回転する物体の回転軸」という比喻によって説明する。

「私は、私にとって揺るぎない命題を明示的に学ぶことは無い。回転する物体の回転軸のように、私は結果としてそれを発見することができる。この軸は、何かをそれをしっかりと掴んでいるという意味で固定されているのではなく、その軸を回る運動が、その不動性を決めているのである。(§ 152、「 $\cdot\cdot\cdot$ 」の強調はウイトゲンシュタイン)」

回転軸の不動性は、何か別のものによって固定されているのではない。回転する運動が、その不動性を決めている。これは、「揺るぎないもの」はその確実さを、言語ゲーム全体から得ているということである。

「子供は多くのことを信じることを自然に学び、やがて信念の体系がつくられていく。あるものは動かしがたく揺るぎないが、あるものはある程度動かせる。その揺るぎなさはそれが本質的に明瞭であるとか説得力があるからということではなくて、その周りにあるものによってしっかりと掴まれているのである。(§ 144)」

「私は確信の根底に達した。そして、この基礎壁は家全体によってもたらされていると言ってもよいだろう。(§ 248)」

また他方、言語ゲーム全体は、言語ゲームの基礎にある「揺るぎないもの」に基づいているものでもある。

「それではなぜ私は、これが私の手であることにかくも確かなのか。言語ゲーム全体がこの種の確実さに基づいているのではないか。(§446)」

要するに、「揺るぎないもの」の確実さは、言語ゲーム全体から得ている一方、言語ゲーム全体の確実さは「揺るぎないもの」に基づいている。そして「揺るぎないもの」それ自体には根拠はない。

なお、ウィトゲンシュタインは、「揺るぎないもの」(確実さ)を得る原因として、文化・歴史を受け継いだ<sup>51</sup>共同体の中での生活や実践、過去の経験<sup>52</sup>、教育を通じた訓練<sup>53</sup>、動物の本能にも似たもの<sup>54</sup>、人間の自然誌<sup>55</sup>(Naturgeschichte)を挙げる。これらは、ストローソンが「社会的実践」と言うものである。

#### 4-1 ウィトゲンシュタインの因果推論に対する考え

ウィトゲンシュタインがヒュームをどのように理解していたかは、彼の著作集の中でヒュームに言及している箇所がないので確かなことは分らない<sup>56</sup>が、因果推論も言語ゲームの一つである<sup>57</sup>。例えば、過去の経験を例にした因果推論を取り上げよう。

「『なぜあなたは、熱い鉄板で火傷をするだろう、と信じるのか』——あなたにはこの信念に根拠があるか。また根拠が必要なのか。(PI §477)」

「過去の経験というものは、私の現在の確信の原因ではあり得るかもしれない。だがその根拠であるだろうか。(§429、「          」の強調はウィトゲンシュタイン)」

「熱い鉄板に触れば火傷をする」という信念に関わる過去の経験は、その信念を持つに

<sup>51</sup> §94

<sup>52</sup> §429

<sup>53</sup> §128, 144, 160, 161, 263, 283, 286等

<sup>54</sup> §359, 475

<sup>55</sup> 「命令する、問う、話をする、しゃべることは、歩く、食べる、飲む、遊ぶことと同様に、我々の自然誌に属している。」(PI §25)、PI §139の欄外(b)

<sup>56</sup> ウリクトは、ウィトゲンシュタインは、ヒュームについては断片的に理解することしかできなかったと述べている、と記している。(「回想」p.32)

<sup>57</sup> 「『原因の経験』と呼ばれうるような本当の経験があるのは確かである。……原因を探し求める際に、原因—結果の言語ゲームの一つの根源がここに見出される。」(PO pp. 372~373, 邦訳 p. 11, 強調はウィトゲンシュタイン)

至った原因ではあり得るが、それは根拠ではない、とウィトゲンシュタインは言う。

過去の因果関係を将来に適用しようとする時、帰納推論の妥当性が問われる。帰納推論は我々にどう関わるのか。ウィトゲンシュタインは、次のように言う。

『『帰納法則』は、経験的な事柄についてのある特定の命題を基礎付けることができないのと同様に、基礎付けることができない。(§ 499、「 $\cdot \cdot \cdot$ 」の強調はウィトゲンシュタイン)』

「我々は、これまでいつも生じたことは今後も生じるであろうという原理に単純に従っているのではないか。——この原理に従うとはどういうことか。我々はこの原理を本当に推論の中に持ち込んでいるだろうか。それとも我々の推理がそれに従っているかに見える自然法則にすぎないのか。この方がありそうなことだ。それ[原理]は、我々の考察の中に含まれている要素ではない。(§ 135、「 $\cdot \cdot \cdot$ 」の強調はウィトゲンシュタイン)」

過去にいつも生じたことは将来も生じるであろうという原理は、我々はそのように推理するというだけで、実在的な関係としてそれを表現するものではない。また、我々は、帰納によって推論しているのではないし、帰納法則を必要ともしない<sup>58</sup>。帰納法則を基礎付けることもできない。むしろその原理は、我々の論理的な考察の要素ではなくて、我々のする自然な推理形式が帰納推論に従っているのではないかとウィトゲンシュタインは言う。それは、我々の言語ゲーム(生活形式)における推論の形式、出来事を判断する形式である。そのため我々は、原因がないと思われる場合でも、原因を探す衝動に駆られるのである<sup>59</sup>。

そしてウィトゲンシュタインは、因果推論を、探究に意味のないものと実験などによる探究に意味のあるものと二つに区別する。紐が引っ張られているのを感じて、紐が何かに引っかかっていることが原因であるのを見てとるのは探究の必要ない因果推論である。また、自分の飼っているヤギが、ある飼料を食べて以来乳の出が悪くなって、実験によってその飼料を見出すのは探究に意味のある因果推論である<sup>60</sup>。前者の因果推論はヒュームの立証的推論に相当する。

では立証的推論のような因果推論を確実なもの(「揺るぎないもの」)にするものは何か。その確実さは、行動において現れる。

<sup>58</sup> 「リスは、今年の冬も貯えが必要だと帰納によって推論するのではない。全く同様に、我々[人間]も、自分たちの行動や予言を正当化するために、帰納法則を必要とはしない。」(§ 287)

<sup>59</sup> 「あらゆることを原因と結果という図式を通してみる衝動が、我々の内でいかに強力であることか」(PO pp. 374~375, 邦訳 p. 14)、他に関連する節として PI § 481

<sup>60</sup> PO pp. 378~379, 邦訳 p. 30

「……それは端的に何かを掴むようなものだ。私が何の疑いも無くタオルを掴むように。しかし、この端的に掴むということは、確かさに対応しているのであって知識に対応しているのではない。(§ 510, 511、「　　」の強調はウイトゲンシュタイン)」

熱い鉄鍋には触れないというのも、過去の経験からそのことを推論して触れないというのではなく、熱い鉄鍋には触れないという行動がまず先に立つのである。その確かさは、知識によるものではなく、行動の内に示される確かさである。

我々は、過去の経験を帰納推論して行動するのではない。端的に揺るぎなく行動するのであり、その行動を正当化するために帰納法則を必要とはしない。端的な行動は、確かさに対応しているのである。ここには、ヒュームの立証的推論と同様の議論がみられる。

ヒュームにおいては、立証的推論に確かさ（信念）を与えるものは、理性（帰納推論）ではなく習慣という実践（自然本性）であった。ウイトゲンシュタインにおいても、ヒュームの立証的推論に相当する因果推論の確かさは帰納法則によるのではなく、行動と言う実践において示されるものである。習慣も行動も実践の一形態なので、この面でヒュームとウイトゲンシュタインは類似していると言えよう。

#### 4-2 ウイトゲンシュタインの物体の存在についての考え

物体の存在についても、ウイトゲンシュタインはヒュームのように、その独立連続存在を問題にしないわけではない。

「誰も観察していなければこのテーブルは消滅したり、形や色を変えたりするが、再びそれを観察する人間が現れると、たちまち元の状態に戻るのだ、とはどうしても信じられない。それはなぜか。——『しかし、一体誰がそんなことを仮定するのだ』——こう言いたくなくなってしまう。(§ 214)」<sup>61</sup>

ウイトゲンシュタインは、一般的な「物理的対象（物一般）」は、色や量と同様に論理学的概念であり、「物理的対象は存在する」というような物一般の存在を表現する命題は定式化されず、ナンセンスだと言う<sup>62</sup>。それで彼は、物一般の存在ではなくて、個別の物の存在を問題にするのであるが、個別の物であっても、例えば、「ある惑星が存在する」という命題よりも、「私には手が二つある」という命題の方を問題にする<sup>63</sup>。この「私には手が二つある」という当たり前の命題を、「私は知っている」と言うことがどういうことなのかを考察すること

61 他に関連する節として § 119, 120

62 § 35, 36, 「[個別の物の] 存在に関する疑いは [通常の] 言語ゲームの中でのみ働く」 (§ 24)

63 § 52, 54



がOCの主要なテーマである。

「ある惑星が存在する」という命題は、それを疑うことや天体観測によってそのことを検証しようとするには意義がある。しかし、「私には手が二つある」という命題は、それを知っていると云ったり、疑ったり、検証しようとするのは、通常はナンセンスだ。「私には手が二つある」ことは、「私は無条件にその信念に従って行動し、決して迷うことがない」 (§251) のが普通である、とウイトゲンシュタインは言う。

「私には手が二つある」ことは、我々が普段、食事をしたり、鼻をかんだり、お風呂で体を洗ったり、車の運転をしたりといった日常生活の行動の内に、「揺るぎないもの」として示されている。それを疑う疑いは、通常は意味不明である。

「私の生活は、あそこに椅子がある、ドアがある、と私が知っていること、あるいはそう確信していることを示す。——例えば私は友人に言う。『あの椅子を持ってきてくれ』、『ドアを閉めてくれ』等と。(§7)」

椅子やドアが存在することは(そして手があることも)、私が「椅子を持ってきてくれ」とか「ドアを閉めてくれ」と言う等、無数の実践の中で、我々が暗黙のうちに受け入れている(世界像の中に取り込んでいる<sup>64</sup>) ことである。「そこに椅子やドアがあること」や「私には手が二つあること」は、揺るぎないものとして我々の日常の生活の基礎にある。

こうした揺るぎないものが基礎にあって、例えば、昨日冷蔵庫にしまっておいたケーキがないのはなぜかといった認知的問いが、通常の言語ゲームにおいて意味をなすのである。その際に、誰が食べたのかと犯人捜しをすることはあっても、ケーキの自然消滅や、そこにある冷蔵庫が昨日まであったのに似た別の冷蔵庫ではないかというようなことは疑わないし、そのような疑いは通常は意味をなさない。

#### 4-3 ウイトゲンシュタインにおける「揺るぎないもの」の身分とその確実さについて

これまで述べてきたように、「熱い鉄鍋には手を触れない」ことや「私には手が二つある」ことは「揺るぎないもの」として、通常の言語ゲームの基礎にあり、その確実さは、日常生活の行動の内に示される。こうした「揺るぎないもの」は、経験命題の形式をしているが、「我々の経験命題の中で特有な論理的役割を果たす命題」 (§136、「 $\dot{\cdot}$ 」の強調は論者) であり、その身分は言語ゲームにおいて規則のような役割を持つ、文法的なものである。

「ところで、『ここに私の手があるということを、私は知 $\dot{\cdot}$ て $\dot{\cdot}$ い $\dot{\cdot}$ る $\dot{\cdot}$ のであって、単に推測し

<sup>64</sup> 我々は、明示された規則なしに純粋に実践的にゲームを学ぶことができるように、世界像も実践を通じて知らず知らずのうちに身に付ける。(§95, 143)

ているのではない』ということは、文法の命題として理解されうるのではないか。(§ 57、「　　」の強調はウィトゲンシュタイン)」

「この世界像を記述する諸命題……の役割は、ゲームの規則の役割に似ている。(§ 95)」

「……経験命題の形式を持つものが全て経験命題ではない、と私は信じる気になっている。(§ 308)」

『「私は、あらゆる判断を放棄することなしにこの命題を疑うことはできない。』  
しかしそれはどういう類の命題なのか。……それは確かに経験命題ではない。それは心理学に属さない。それはむしろ、規則の性格を持つ。(§ 494、「　　」の強調は論者)』

ヒュームにおいて、自然本性としての観念連合(想像力)や習慣は、立証的推論の信念の原  
因であって、その確実さは、「感じる」という心理的な確実さにあった。

しかし、ウィトゲンシュタインの実践において示される確実さは、そうした心理的な確実さ  
ではない。その確実さは、それ自体に根拠はないが、「揺るぎないもの」として言語ゲームの  
基礎にあって、一つの体系を形成し、規則のような役割を果たす、文法的な確実さにある。

さて、ウィトゲンシュタインは、語の意味の理解に、語に伴うイメージや心理的な感じを持  
つことを根拠にすることを批判する。それは無限後退に陥ることにもなるし、またイメージや  
感じをいつも必ず持つことはないからである<sup>65</sup>。

例えば、「そして」や「でない」という語を使用する時、特定の感じが伴う場合があること  
は勿論そのとおりであるが、その同じ感じや他の何らかの感じがいつも必ず伴うということ  
はないと、ウィトゲンシュタインは言う。彼は、語に伴うイメージや感じ等の感覚は、語の意  
味を理解するための必要十分条件ではないと考えている<sup>66</sup>。

このことと同様に、ウィトゲンシュタインは「揺るぎないもの」の確実さをヒュームのよう  
に心理的な「感じる」ことに求めることは全くないと思われる。なぜなら、そのような心理  
的に確実な「感じ」が、「揺るぎないもの」にいつも必ず伴うとは限らないからである。

さて、ストローソンが、ヒュームの「自然本性」に対して、ウィトゲンシュタインの「社会  
的实践を通じて非明示的に形成されるもの」と言うものは、文化・歴史を受け継いだ共同体の  
中での生活や実践、過去の経験、教育を通じた訓練、動物の本能にも似たもの、人間の自然誌

<sup>65</sup> BB の pp. 3～5, 11～12, 78～79, 邦訳 pp. 24～27, 37～39, 135～136

<sup>66</sup> ウィトゲンシュタインは、「語の意味とは、言語内におけるその使用である」(PI § 43) と言う。他に PI § 10, 20, 29, 197 等、BB の pp. 4～5, 邦訳 pp. 27～28

などを通じて形成されるものことであるが、これらは「揺るぎないもの」の確実さの根拠ではなく、ヒュームの場合と同様に、確実さの生まれる原因である。

「揺るぎないもの」の確実さの内実は、言語ゲームの構造全体から生まれるのであって、それは規則に従う（ある特定の実践を身に付ける<sup>67</sup>）時のような文法的な確実さであり、行動の中で示されるものである。

以上のように、ウィトゲンシュタインにおいて、ヒュームの立証的推論に相当する因果推論や日常の個別の物の存在の「揺るぎないもの」の身分は、言語ゲームの基礎にあって、言語ゲームにおいて規則のような役割を果たす文法的なものであり、それ自体には根拠はない。そして、その確実さは、「感じる」というヒュームにおけるような心理的な確実さではなく、言語ゲームの構造全体からもたらされる文法的な確実さである。それは行動において示される確実さであり、規則に従う時のような確実さである。

そして、そうした「揺るぎないもの」を持つに至る原因が、文化・歴史を受け継いだ共同体の中での生活や実践、過去の体験、教育を通じた訓練、動物の本能にも似たもの、人間の自然誌なのであり、ストローソンはそれを「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」として措定したのである。

しかし、ストローソンが措定したこれらのものは、「揺るぎないもの」を持つに至る原因であって、その確実さの内実を説明するものではない。

ストローソンは、「揺るぎないもの」の確実さが、言語ゲームの構造全体からもたらされるということ、「揺るぎないもの」が言語ゲームにおいて規則のような役割を果たしているということ、それは経験命題の形をしていても言語ゲームの中では文法的（論理的）な身分を持つものであること、こうした観点を、全く見落としてしまっている。

ストローソンは、自然主義的方法によって「懐疑論を無視する（避ける）」と言う。しかし「懐疑論を無視する（避ける）」というだけでは、ヒュームの際に論じたのと同じように、懐疑論に対して効果がない。それはどちらも懐疑論を無視する（避ける）と言うだけで、「揺るぎないもの」の確実さの内実を示すものではないからである。従って、ストローソンが「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」として措定するものによって、「揺るぎないもの」の確実さがどのようにして示されるのかという問題は、依然として残っている。

## 5. まとめ

ヒュームとウィトゲンシュタインについての以上の考察から、次のことが帰結する。

67 「『規則に従う』ことは一つの実践である。」(PI § 202)

ヒュームもウイトゲンシュタインも、疑いの排除されている因果関係（立証的推論）、物体の存在の疑いなきについて論じており、それらに対する疑いは、ストローソンの言う様に、両者にあつていずれも無視されてよい疑いである。その無視する根源としてストローソンがあげるのは、ヒュームにおいては「自然本性」、ウイトゲンシュタインにおいては「社会的実践（文化・歴史を受け継いだ共同体の中での生活や実践、過去の体験、教育を通じた訓練、動物の本能にも似たもの、人間の自然誌など）を通じて非明示的に形成されるもの」である。

しかし、ヒュームの「自然本性」や、ウイトゲンシュタインの「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」は、そうした「揺るぎないもの」を持つに至る原因であつて、それらを指定することによって懐疑論を無視する（避ける）としても、それによって「揺るぎないもの」の確實さが示されることにはならない。

従つて、ストローソンの「自然本性」や「社会的実践を通じて非明示的に形成されるもの」を根源とする自然主義的方法は、「疑いの排除されているもの（揺るぎないもの）」の確實さの内実を示すものではない。

疑いが排除されているものの確實さを示すことができるのは、ウイトゲンシュタインの考察する言語ゲームの構造という観点からである。ストローソンはこの点を全く見落としている。

言語ゲームは、通常言語ゲーム（認識的ゲーム）と、その基礎にある「揺るぎないもの」から成り立っている。「揺るぎないもの」自体に根拠はない。これらは一体となつて、言語ゲームの体系全体を有意義なものにしている。「知っている」とか「疑う」等の通常言語ゲームは、この「揺るぎないもの」が基礎にあつて初めて意味あるものとなる。従つて、「揺るぎないもの」は、我々の通常言語ゲームが行われる可能性の条件ともいえる。

そして、「揺るぎないもの」は、ヒュームの言うような確實な「感じ」や「心持ち」という心理的な確實さから揺るぎないのではない。その確實さは、言語ゲームの構造全体の中にあつて、規則のような役割を果たしているところから揺るぎないのである。それは、行動において示される確實さであり、規則に従う時のような確實さである。文法的な確實さである。

通常言語ゲームの中で行われる認識的ゲームでは、そこでなされる言明や疑いについての根拠を問うことには意味がある。しかし、その認識的ゲームの基礎にあつて、そのゲームを意味あるものにして「揺るぎないもの」には根拠はない。それを疑うことは「規則違反」（§647）で意味をなさない。そのような疑いは、通常言語ゲーム（認識的ゲーム）でなされる有意味な疑いに、疑いの表現形式が似ているため、意味をなさない疑いであるにもかかわらずそのことを見て取ることができなくて、意味ある疑いのように思われてしまうのである。

従つて、懐疑論者による因果推論（立証的推論）や外的世界の存在に対する疑いのような「揺るぎないもの」に対する疑いは、意味をなさない疑いなのである。

## 参考文献

- Hume, David, *A Treatise of Human Nature*, Norton, David Fate and Mary J. Norton (eds.), Oxford Philosophical Texts: Oxford University Press, 2007 [1739-1740]. 『人間本性論』木曾好能訳, 法政大学出版局, 2011年 [1995年初版] (引用において本文を「T」、付録を「App」と表示、併せてセルビー・ビッグ、ニデイッチ版によるページを「SBN」と表示)
- , *An Abstract of a Book Lately Published; Entitled, a Treatise of Human Nature, & c. Wherein the Chief Argument of That Book is father Illustrated and Explained* [1739-1740] in Hume, *A Treatise of Human Nature*. 『人間本性論摘要』斎藤繁雄訳, 『人間知性研究』所収 (引用において「Ab」と表示、併せてセルビー・ビッグ、ニデイッチ版によるページを「SBN」と表示)
- , *Enquiries Concerning Human Understanding and Concerning the Principle of Morals*, reprinted from the posthumous edition of 1777 and edited with introduction, comparative table of contents, and analytical index by L. A. Selby-bigge, M.A. third edition with text revised and notes by P. H. Hidditch, Oxford: Clarendon Press, 2010 [1748], 『人間知性研究』斎藤繁雄・一ノ瀬正樹訳, 法政大学出版局, 2004年 (引用において「EHU」と表示、併せてセルビー・ビッグ、ニデイッチ版によるページを「SBN」と表示)
- Moore, G. E. [1959], *Philosophical Papers* (George Allen and Unwin Ltd, The Macmillan Company, 1959)
- Strawson P. F. [1985], *Scepticism and Naturalism: Some Varieties*, the Woodbridge Lectures 1983, Routledge, 1985, 2008
- Wittgenstein, Ludwig, *The Blue and Brown Books*, 1972, Basil Blackwell Oxford, 2nd edn. 1969, 『青色本・茶色本』大森荘蔵訳, ウィトゲンシュタイン全集 6, 大修館書店, 1975年 (引用において「BB」と表示)
- , *Philosophical Investigation*. Trans. G. E. M. Anscombe, 2007, Basil Blackwell, 3rd edn. 2001, 『哲学探究』藤本隆志訳, ウィトゲンシュタイン全集 8, 大修館書店, 1976年 (引用において「PI」と表示)
- , *Philosophical Occasions 1912-1951*, James C. Klagge and Alfred Nordmann (eds): Hackett Publishing Company, Indianapolis & Cambridge, 1993, 一部邦訳『原因と結果: 哲学』羽地亮訳, 晃洋書房, 2010年 (引用において「PO」と表示)
- , *On Certainty*, G. E. M. Anscombe and G. H. von Wright (eds). Trans. D. Paul and G. E. M. Anscombe. Basil Blackwell Oxford, 1979, 『確実性の問題』黒田亘訳, ウィトゲンシュタイン全集 9, 大修館書店, 1975年 (引用において「OC」と表示)
- ノーマン・マルコム他『回想のウィトゲンシュタイン』藤本隆志訳, 法政大学出版局, 1974年 (*Ludwig Wittgenstein, A Memoir*, with a Biographical Sketch by Georg Henrik von Wright, 1958) (「回想」と表示)
- バリー・ストラウド『君はいま夢を見ていないとどうして言えるのか』永井均 [監訳], 岩沢宏和・壁谷彰慶・清水将吾・土屋陽介訳, 春秋社, 2006年 (*The Significance of Philosophical Scepticism*, 1984)

キーワード：自然主義、自然本性、確実さ、揺るぎないもの

**Abstract**

Hume and Wittgenstein: Making Remarks on the Way of Naturalism with Scepticism by Strawson P. F.

Satoshi Hashimoto

Strawson argues that there is another way with scepticism which is not an attempt directly to refute it by rational argument drawing on commonsense or theological or quasi-scientific considerations. Vis-à-vis traditional scepticism he proposes the naturalist position. He considers a response which does not so much attempt to meet the challenge as to pass it by. In characterizing the position he yokes Wittgenstein to Hume. In his naturalism Strawson does not examine the reason for the certainty with 'unshakeable thing', but argues only the causes of them.

According to Wittgenstein, certainty belongs to 'unshakeable thing' that underlies all our ordinary language-games. In the entire system of our language-games 'unshakeable thing' belongs to the foundation of it and the whole language-games rests on this kind of certainty. Ordinary language-games such as about knowledge, doubt, belief, etc. make sense only when our language-game has 'unshakeable thing' as foundation. The status of 'unshakeable things' can be conceived as propositions of grammar; in the system of our empirical propositions they have a peculiar logical role, that is, they have the character of a rule.

Strawson fails to grasp the point of view about the system of our language-games.

Keywords: naturalism, nature, certainty, unshakeable thing